

王朝漢詩文における〈和〉と〈漢〉

— 藤原公任の作品を中心に —

鄭 順 粉*

目 次

1. はじめに
 2. 和漢兼作者藤原公任
 3. 藤原公任をめぐる〈和〉と〈漢〉
 4. 〈落花〉詩における〈和〉と〈漢〉
 5. 〈山家〉詩における〈和〉と〈漢〉
 6. おわりに
-

1. はじめに

平安初期、漢詩文は三代勅撰漢詩集『凌雲集』『経國集』『文華秀麗集』の編纂によって一大盛期を迎える。それは嵯峨帝の強い指導力と影響の下で宮廷貴族達を中心とした文壇形成によって可能になったもので、この時期漢詩文の性格は、〈漢風謳歌の時代〉や〈國風暗黒の時代〉と称されるように〈漢〉的な要素が大きかった¹⁾。その後、平安漢詩文は中國の漢文學をより多く攝取、受容し日本的な展開を見せるようになり、日本固有の仮名文字によって成立したもの(仮名文學)と密着する。すなわち、漢詩文を單なる外國文學として受容するに止まらず、異國の言語(思想・觀念)によって自國の思想や感性がより固有のものとして覺醒され、より豊かで可能性に富んだ國的文化として醸成していったのである²⁾。そのような漢詩文の受容は、当然〈漢〉から〈和〉への影響を基本とするが³⁾、兩者の価値が相對的に接近するにつれて、だんだん〈和〉から〈漢〉への影響も顯著になってくる。特に、「倭詩」(和製漢詩＝王朝漢詩)は、漢風表現の旺盛な攝取や、硬質的・模倣的習作著しい嵯峨朝文壇の唐風讚美時代を経つつ、九・十世紀頃日本の國文學として自律性を覺醒・誇示させていき、以後漸進的に自國文學として定着していく。

本稿ではその「倭詩」を對象にし、それに表された〈和〉と〈漢〉について考えてみようと思う

* 培材大學校 日本學科 助教授 日本古典文學

- 1) この時期における漢詩文受容の様相については、例えば金原理「嵯峨朝文壇の基調」(『平安朝漢詩文の研究』九州大學出版部 1981)に詳しい。p.7-54
- 2) この過程については多くの論文において述べられており、本間洋一「和歌と漢詩文—中古・中世の私家集をめぐる」(『中央大學國文』1990 3)や「王朝詩歌の表現位相—詩語と歌ことば」(『古今集と漢文學』1992 9)などが代表的なものである。p.44-61
- 3) 従來の研究は、主に〈漢〉から〈和〉への受容に焦点が当てられることが多かった。後藤昭雄「菅原道眞とその時代」(『平安朝漢詩文學論考』所收 櫻楓社 1971)、佐藤道生「大江匡房の『文選』受容」(『平安後期日本漢文學の研究』所收 笠間書院 2003)などがあり、拙稿「『簾を巻き上ぐ』ことの意味—『枕草子』『香爐峰の雪』の段の位相」(『日語日文學研究』1998 10)もその一つである。p.79-200、p.83-96

が、当時和漢兼作者として最も名の高かった藤原公任の漢詩文を中心に考察する。

2. 和漢兼作者藤原公任

和歌と漢詩両方にかけて作品を制作した和漢兼作者にとって、〈和〉と〈漢〉の問題は常に尖鋭な関心の対象であったはずである。中でも、『尊卑文脈』に「才人・和漢博覧」と記される藤原公任は、和歌と漢詩両方で活躍をし、多方面において作品を残している。『本朝麗藻』などの漢詩集収録の漢詩をはじめとして、『新撰髓脳』『和歌九品』などの歌學書、『公任集』『拾遺集』などの和歌集、そして和歌と漢詩文の詞花集『和漢朗詠集』などの著作がある⁴⁾。中でも、『和漢朗詠集』は、当時人口に膾炙した詩歌を〈和〉的な情緒によって並べ、漢詩文の世界がより〈和〉の世界に近接する基盤となったものである。

『大鏡』三船の才の説話は、そのような和歌と漢詩両方に長けていた藤原公任の才能を端的に示している。

ひととせ、入道殿の大堰川に逍遙せさせたまひしに、作文の船・管弦の船・和歌の船と分かつたまひて、その道にたへたる人々を乗せさせたまひしに、この大納言のまゐりたまへるを、入道殿、「かの大納言、いづれの船にか乗らるべき」とのたまはすれば、「和歌の船に乗りはべらむ」とのたまひて、よみたまへるぞかし、

小倉山嵐の風の寒ければもみちの錦きぬ人ぞなき
申しうけたまへるかひありてあそばしたりな。御みづからもたまふなるは、「作文のにぞ乗るべかりける。さてかばかりの詩をつくりたらしましかば、名のあがらむこともまさりなまし。口惜しかりけるわがかな。さて、殿の、『いづれにかと思ふ』とのたまはせしになむ、我ながら心おごりせられし」とのたまふなる。一事のすぐるだにあるに、かくいづれの道もぬけ出でたまひけむは、いにしへもはべらぬことなり。

(『大鏡』 「太政大臣頼忠 廉義公」)

藤原道長が、大井川で舟遊びを催し、漢詩・音楽・和歌の三つの船を設営した上、堪能の人物を分乗させるが、公任は和歌の船を選定し、「小倉山」歌を詠出する。公任自身は、和歌詠出後、作文の船に乗ったらよかったと後悔しており、当時男性貴族にとって第一の文學である漢詩文に對する未練を見せるが、實は公任は和歌表現の現出によって和歌の才能のみならず、漢詩表現の才能をも十分發揮している。公任の「小倉山」歌は、「小倉山」と「嵐」山の素材的な待遇表現、「小倉山」と「もみちの錦」の明暗や色彩的な對比表現、「風」を「寒」とし紅葉を錦に喩える表現など、漢詩の發想をそのまま和歌の表現に具現しているのである⁵⁾。『大鏡』の作者も、そのような和漢兼作者としての公任の才能を前代未聞の秀才であると譽め称えており(傍線部)、このエピソードが、實際の史實ではないにして

4) 藤原公任の伝記については、久保木哲夫「王朝の歌人藤原公任」(『和歌文學講座』所収 笠間書院 1993)がある。p.245-260

5) この三船の才の説話については、他にも「藤原公任の三舟才譚—漢詩發想の和歌表現」(『解釋』1975 1)に詳細に論じられている。また、公任の詩論と歌論に關する論文としては、小澤正夫「平安前期の歌論と中國詩論—藤原公任の歌論を中心として」(『古今集と漢文學』所収 1992)がある。p.241-262

も、公任がいかに和漢兼作の権威者として当時広く知られていたか、窺い知られる。

実際、一條朝の四大納言(藤原公任・源俊賢・藤原行成・藤原齊信)の一人として数えられた公任は、作文會に参加し多数の漢詩を制作している。一條朝は内裏と道長邸で詩宴や詩會が頻繁に開かれ、専門詩人だけでなく一般官人にも漢詩文制作が奨励されていた時期である⁶⁾。公任がその時詠出した漢詩が、『本朝麗藻』『類聚句題抄』『江談抄』『新撰朗詠集』『和漢兼作集』『中右記部類紙背漢詩集』などに収められている。例えば、公任が作文會で制作した詩の中で次のようなものがある。

同然。(「花鳥春資貯」)

春多資貯足相尋(春は資貯多く尋ぬるに足る)
 非啻花飛也鳥吟(啻だに花の飛ぶのみに非ず、也た鳥吟じたり)
 裁錦惜將風底色(錦を裁ちて惜しみ將てり 風底の色)
 貫珠銜得月前音(珠を貫きて銜み得たり 月前の音)
 林勝茅土三千戸(林は茅土の三千戸に勝り)
 谷咲華山一万金(谷は華山の一万金を咲へり)
 軟語關々頻報處(軟語關々たり 頻りに報ぐる處)
 拾葩還恥不廉心(葩を拾ひて還て不廉の心を恥おたり)

(『本朝麗藻』9)

この詩は、『權記』によれば、寛弘3年(1006)3月24日、詩題を「花鳥春資貯」として左大臣道長邸で行われた作文會に制作したもので、当日の参加者は、他に、藤原齊信(『本朝麗藻』8)、藤原公任(同9)、大江通直(同10)、大江匡衡(『江吏部集』卷下)、藤原行成(『行成詩稿』)などの名が知られる。

上記の公任詩においては、晩春、眼前の落花と鳴鳥の美を「裁錦」(『春秋左氏伝』)「貫珠」(『礼記』)「茅土」(『書經』)「關々」(『詩經』)などの漢籍の句によって譽め称え、道長の陰徳を仄めかしている。当時最高権力者主催で開かれた詩宴であるだけ、詠じ方は極めて儀礼的であつ典型的である。

このように、公任は、和歌だけではなくおおよけの詩文會にも参加し漢詩をよく制作していたことが確認される。当時和漢兼作者として最も名の高い官人の一人だったのである。

3. 藤原公任をめぐる〈和〉と〈漢〉

ところで、公任の〈和〉と〈漢〉に対する興味は、おおよけの場で和歌や漢詩を詠出することに止まるものではなかった。日常的な場面においても、公任は漢詩を和歌に翻案することを試している。一つの例を見てみよう。

二月つごもりころに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿司來て、「かうてさぶらふ」と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の」とあるを見れば、懷紙に

すこし春あるここちこそすれ

6) 一條朝の漢詩文の傾向については、すでに拙稿「一條朝の貴族と漢詩文—藤原齊信を中心に」(『日本語文學』2003 3)において述べた。p.143-162

とあるに、げに、今日のけしきいとうあひたる。これが本は、いかでか付くべからむと、思ひわづらひぬ。「誰々か」と問へば、「それぞれ」と言ふ。皆いとはづかしき中に、宰相の御答へを、いかでかことなしびに言ひいでむ、と、心一つに苦しきを、御前にご覽せさせむとすれど、上のおはしまして御殿籠りたり。主殿司は「とく、とく」と言ふ。げに、遅うさへあらむは、いと取り所なければ、さはれとて、

空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書いて取らせて、いかで思ふらむと、わびし。これがことを聞かばや、と思ふに、そしられたらば聞かじとおぼゆるを、「俊賢の宰相など、『なほ内侍に奏してなきむ』となむ定めたまひし」とばかりぞ、左兵衛の督の、中將にておはせし、語りたまひし。

(『枕草子』102段)

公任が贈った「すこし春あるここちこそすれ」句は、『白氏文集』「南秦雪」の第4句「二月山寒少有春」に基づいたものである。

南秦雪(南秦の雪)

往歳曾爲西邑吏	(往歳曾て西邑の吏と爲り)
慣從駱口至南秦	(駱口より南秦に至るに慣る)
三時雲冷多飛雪	(三時雲冷かにして多く雪を飛ばし)
二月山寒少有春	(二月山寒うして少しく春有り)
我思旧事猶凋長	(我は旧事を思うて猶凋長す)
君作初行定苦辛	(君は初行を作して定めて苦辛せん)
仍頼愁猿寒不叫	(仍ほ頼に愁猿寒うして叫ばず)
若聞猿叫更愁人	(若し猿の叫ぶを聞かば更に人愁へしめん)

(『白氏文集』卷14「酬和元九東川路詩 十二首」)

詩全体の内容は、任地「南秦」に向かう親友(元九)の苦勞に對する同情や勵まして、公任の句が踏まえている第四句「二月山寒少有春」は、長安では春のたけなわであるはずの二月にも、山里である「南秦」は寒くて春の氣配の少ない氣候をあらわしている。公任の「すこし春あるここちこそすれ」句は、「少有春」部分を和歌の下句にしたものであるが、ただし、原詩では「春の氣配が少ない」と否定的な意味になっているものを、「すこし春あるここちこそすれ」と肯定的な意味に変えている⁷⁾。これは、漢詩文(原詩)と和語(和歌)、どちらに重点をおくかによって、それに相應する付け句(上の句)の方向が変わってくる、難問である。和漢兼作の權威者公任から句を贈られて、どう答えればよいかと、苦惱している清少納言の姿が看取される。

該当の公任句は、『公任集』の中にも見られる。

人に、春のはじめなり
すこし春ある心ちこそすれ

7) 公任句が否定的な意味であることについては、伊東倫厚『『枕草子』『少し春ある心ちこそすれ』と『白氏文集』『二月山寒少有春』と一又名『少有春』小考』(『竹田晃先生退官記念 東アジア文化論叢』1991 6)に論じられている。

と給ひければ
吹きそむる風もぬるまぬ山里は

(『公任集』57)

この場合は、具体的な状況は語られていないが、白樂天の原詩通りに春の氣配が少ない意味に詩想を展開させた、早春の歌として収められている。公任は、漢詩句を和歌に翻案することを、ある特定の人物にだけでなく、周りの人にたびたび行っていたことが分かる。

以上のようにして見れば、公任は、漢詩と和歌両方に才能を發揮し、日常生活の中でも、〈和〉と〈漢〉の問題を周りの人を対象に色々としていたことが確認される。それには、〈和〉と〈漢〉の問題をめぐる、一種の文芸的な場が作られ、遊戯的な緊張感をも醸し出していたものと見られる8)。

4. 〈落花〉詩における〈和〉と〈漢〉

では、公任の具体的な作品を見てみることにしよう。公任の漢詩作品は、『本朝麗藻』『類聚句題抄』『江談抄』『新撰朗詠集』『和漢兼作集』『中右記部類紙背漢詩集』などに収められているが、その中から一つの例をあげてみる。

度水落花舞(水を 度りて 落花 舞ふ)
洞中今望落花明(洞中に 今 落花の明らかなるを望む)
度水舞時俗眼驚(水を度りて舞ふ時 俗眼驚きたり)
應下粧樓飄岸處(粧樓を下るべし 岸に飄ふ處)
似翻羅袖映波程(羅袖を翻すに似たり 波に映ずる程)
雙行蝶導流心動(行を双ふる蝶導きて 流心動きたり)
送曲風來浮艷經(曲を送る風來て 浮艷輕やかなり)
爲侑陽春新調奏(爲に侑はむ 陽春の新しき調べを奏せむことを)
宮商自有治安聲(宮商 自ら治安の聲有るべし)

(『本朝麗藻』14)

この詩は寛弘三年(1006)三月四日に東三條第(藤原道長邸)で行われた詩文會で制作されたものである(『御堂關白記』)。当日の作文會は、大江匡衡の詩(『本朝麗藻』11)の序文にも詳しく述べられているように、一條天皇臨席の下で公卿達が大大小小的に参加して開かれた宴會である。詩題は「渡水落花舞」で、東三條第の景觀や庭園の美しさを描き、一條天皇や当時最高の權力者道長を讚美するかたちで展開された。この時公卿達が先を争って詩を制作し、『本朝麗藻』には藤原道長・藤原伊周・藤原齊信・源明理・紀爲基・源孝道・橘爲義・藤原爲時・藤原廣業などの詩が並んで収められている9)。

8) 他にも、当時宮中では、〈和〉と〈漢〉の問題をめぐる文芸的な遊戯を行っており、藤原齊信もその一人であった。その様子については、拙稿「『草の庵を誰か尋ねむ』句の意味—枕草子の和歌の一性格について」(『平安朝文學研究』2000 12)において述べた。p.60-70

9) 『本朝麗藻』の性格については、後藤昭雄「一條朝詩壇と『本朝麗藻』」(『平安朝漢文學論考』櫻楓社 1

上記の公任の詩も、そのような華やかな宴會の中で詠じられたもので、晩春散る花の美しさを述べている。花びらが水面を渡って舞うように散りかかり岸辺に打ち寄せられ波の動きに合わせて揺れている、可憐な姿を描き、そこに仙境を思い起こしながら、現世への讚美で結んでいる。空中→水面→岸辺と、視線の移動に従って落花の美を描きながら、蝶や音楽、風との調和をもち、当日の様子と仙境の世界とを合い重ね幻想的な雰囲気醸し出していると言える。

このように〈落花〉を華やかに描く方法は、漢詩においては一般的な詠法である。まず、中國の漢詩を見てみよう。

春來頻与李二賓客郭外同遊、因贈長句

(春來って頻りに李二賓客と郭外に同遊し、因りて長句を贈る)

風光引歩酒開顔(風光歩を引き、酒顔を開く)
送老鎖春嵩洛間(老を送り春を鎖す嵩洛間)
朝踏落花相伴出(朝には落花を踏んで相伴って出づ)
暮隨飛鳥一時還(暮には飛鳥に隨って一時に歸る)
我爲病叟誠宜退(我病叟のため誠に退くべし)
君是才臣豈合閑(君是才臣豈閑を合わせるべきや)
可惜濟時心力在(惜しむべく時を濟み心力在り)
放教臨水復登山(水に臨み復山に登りて放教す)

(『白氏文集』卷66)

この詩は、白樂天が仲のよい李二賓客と晩春の一日を郊外に遊んだ様子を描いたもので、836年、白樂天六十五歳、洛陽での作である。落花を踏みながら残り少ない春を楽しみ遊ぶ氣持ちを詠じ、殘春への惜しみを表している。

日本の漢詩文においても同様の様子が見られる。

春日、侍前鎮西都督大王讀史記、應教

(春日、前鎮西都督大王史記讀ふに侍して、教に應ず)

古人有言、荆山之璞雖美、不琢不成其宝、顔閔之才雖茂、非學非弘其量。是故鎮西都督大王、受史記於吏部江侍郎。蓋尋聖訓也。

大王仁義有余、百行無失。雖習馬遷之史、不忘車胤之勤。復樂在爲善、若非東平王之後身、業只好文、則是曹子建之再誕。

于時綠觴頻傾、絃管緩調。春花面面、飛入酣暢之筵。晚鶯聲聲、与參講誦之座。朝綱質謝水光、文慙雕虎。猥奉大王之教、聊獻小子之詞。謹序。

(古人の言に曰く楚山の璞は美なりと雖も、琢かざればその宝を成すこと能はず、顔淵閔子騫の才は秀でたりと雖も、學ばざればその量を弘むること能はずと。是の故に太宰帥親王史記を大江式部大輔に受け給ひぬ。蓋し聖人の訓を尋ね給ふなり。

親王は仁義余りて百行欠くことなく、史記を學び給ふにも勤學を忘れ給はず。又善をなすことを楽しみ給ふは、第二の東平王蒼とも謂ふべく、文學を好み給ふは、陳思王植の生まれ変りども謂ふべし。

時に酒杯は頻りに傾けられ、音楽は緩く調べらる。春花は面面酣樂の席に飛び入り、晚鶯は聲聲

講誦の座に交り鳴けり。朝綱性質拙くして、文章美ならず。猥りに親王の教を奉じて、敢て小詞を獻じ奉るなり。) (『本朝文粹』卷九 詩序二 論文 後江相公)

天慶七年(944)三月史記の竟宴の際制作されたもので、學問の研鑽の重要性を述べながら、大宰帥成明親王の學才を譽め称えて、酒宴の具体的な様子を描いている。ここでは、晩春の詩宴の様子を、花と鶯それぞれを擬人化し、視覚・聴覺の取り合わせで巧みに描寫しており、散る花びらが楽しい宴席に勝手に入り込むと、酒宴の興趣をかき立てるものとして落花を取り上げている。つまり、晩春の宴會の座興を増すものとして〈落花〉が常套的に取り上げられていたことが確認される。

上記の公任の『本朝麗藻』14「度水落花舞」も、そのような漢詩の詩風を受け継いだものと見られるが、それは、和歌における表現性とだいぶ隔たりのあるものであった。〈散る花〉は、和歌の中でははかなさや悲しみ、恨みなどの感情をともなう悲觀的な捉え方が一般的であった¹⁰⁾。次の和歌を見てみよう。

- ① うつせみの世にも似たるか花ざくらさくと見しまにかつちりにけり
(『古今集』春 73 讀人不知)
- ② 櫻の花の散るを見て
いつの間に散りはてぬらん櫻花おもかげにのみ色を見せつつ
(『後撰集』春 132 みつね)
- ③ 荒れはてて人も侍らざりける家に櫻の咲き亂れて侍りけるを見て
浅茅原主なき宿の櫻花心やすくや風に散るらん
(『拾遺集』春 62 惠慶法師)

櫻が咲いてすぐ散ってしまうのをはかない世の中に喩えたり(①)、櫻が散ってしまった後も面影で長くとどめておきたい気持ちをあらわしたり(②)、また花を散らす風を嫌う類型的な趣向を裏返ししたり(③)するのである。公任自身もそのような和歌の一般的な詠み方によって次のように詠んでいる¹¹⁾。

- ① 三月十日、松が崎の念仏きゝに、女御、うへなど忍びておはしけるに、道の程
月おぼろして風の聲など遙なり
晝ならば河辺の花も見るべきに夜はの嵐のうつろめたさよ
(『公任集』40)
- ② 父とまうせ給ふての比、たきもの人のこひたるつかはすとて
花だにも散りたる宿の垣ねには春のなごりもすくなかりけり
(『公任集』254)

すなわち、嵐によって花が散ってしまうのを恐れる気持ち(①)や、散る花の空しさ(この場合は父

10) 〈散る花〉は、『古今集』『春下』の〈散る櫻〉歌群(69~89)に定型化して表されているように、和歌の中では空しく儂ない悲哀感を伴うものであった。ただし、時代が下るにつれて、悲哀感の程度が薄れてくることはある。

11) 公任の詠歌姿勢については、坂口和子「藤原公任の詠歌についての覺書」(『羽衣國文』1987 3)に詳しい。

親の没したことを喩えている)(②)が詠まれている。

結局、公任の上記の漢詩における〈落花〉の表現は、伝統的な和歌の世界ではあはれせない詩想を、漢詩という形式によって吟じ上げたものと見ることができる。

一方、公任の『度水落花舞』詩には、〈和〉の要素も共存している。〈落花〉の美しい風景を描き出すのに、〈舞姫〉の比喻を用いている点である。

〈舞姫〉は宮中の行事の際、舞いを披露することで、その仙女のような幻想的な姿が仮名文学の中によく描かれたりした。和歌の中では、例えば、

五節の舞姫を見て、よめる
天つ風雲の通ひ路ふきとおよ乙女のすがたしばしとどめむ
(『古今集』雑 872 良岑宗貞)

のように、舞姫を天女に見立てて、舞い終わってもなお地上にとどめてその姿をみたいというかたちで歌われていたのである¹²⁾。また、十一月の大嘗祭や新嘗祭の女樂に奉仕する五節の舞姫は、仮名散文文学においても、頻繁に取り上げられる素材であった。

五節の参る儀式は、いづれともなく心々に二なくしたまへるを、舞姫の容貌、大殿ろ大納言殿とはすぐれたりとめでのしる。げにいとをかしげなれど、ここしうつくしげなることは、なほ大殿のにはえ及ぶまじかりけり。ものきよげにいまめきて、そのものとも見ゆまじうしたてたる様体などのありがたうをかしげなるを、かうほめらるるなめり。例の舞姫どもよりはみなすこしおとなびつつ、げに心ことなる年なり。殿参りたまひてご覽するに、昔御目とまりたまひし少女の姿思し出づ。辰の日の暮つ方つかはす。御文の中思ひやるべし。

をとめごも神さびぬらし天つ袖ふるき世の友よはひ経ぬれば
年月の積もりを數へて、うち思しけるままのあはれをえ忍びたまはぬばかりのをかしうおぼゆるもはかなしや。
(『源氏物語』「少女」)

これは平安中期の宮中の様子が最もよく表されている『源氏物語』の一部分であるが、五節の舞姫をめぐる周りの人の動きが詳細に描かれている。五節の舞姫は、大嘗祭に五人、新嘗祭に四人(公卿から二人、受領から二人)を出す、この年は新嘗祭で、四人が参内する。中の丑の日、五節殿(常寧殿)へ舞姫が参内し、天皇が帳台に出御して舞いを観覧する、帳台の試みが行われる中で、四人の舞姫の中で光源氏が出した惟光の娘が一段と容貌が優れていると噂している。また、正式に五節の舞が披露される豊明の節會に、光源氏はその美しい姿態を見て昔戀慕の念を抱いていた筑紫の五節の君を思い出し、歌を贈り、多年を経てなおも捨てきれぬ戀の執心を訴える。当時舞姫が如何に美貌に優れ、羨望の対象であったかが窺われるが、この場合も「をとめごも」歌の「天つ袖」に見るように、舞姫を天人に擬している様子が看取される。もう一つの例を見てみよう。

宮の五節出ださせたまふに、かしづき十二人、異所には、女御、御息所の御方の人出だすをば

12) 漢詩文の中には、妓女のイメージが舞姫としてたびたび登場し、例えば『九日侍宴。各分一字、応製』(『菅家文章』99)や菅贈大相國「早春内宴侍仁壽殿、同賦春娃無氣力応製」(『本朝文粹』卷9)などに描かれているが、舞姫の幻想的な姿という点で、日頃親しんでいる五節の舞姫のイメージにより近いと思われる。

わろきことになむすると聞くを、いかにおぼすにか、宮の御方を十人は出ださせたまふ。今二人は、女院、淑景舎の人、やがてはらからどちなり。(中略)

上る送りなどに、なやましと言ひて行かぬ人も、のたまはせしかば、ある限り連れ だちて異にも似ず、あまりこそうるさげなめれ。舞姫は相尹の馬の頭の女、染殿の 式部卿の宮の上の御おとうとの四の君の御腹、十二にて、いとをかしげなりき。

果ての夜も、おひかづき出でも騒がず、やがて仁壽殿より通りて、清涼殿の御前 の東の簀子より、舞姫を先にて、上の御局にまゐりしほども、おかしかりき。

(『枕草子』86段)

正暦四年(993)十一月十二日の記事で、舞姫と介添え役の女房を出すことをめぐって中宮定子が行った異例的なことや、それに關わる出来事が生き生きと描かれている。舞姫に對する關心の大きさが確認される。

以上のようにして見れば、上記の公任の『本朝麗藻』14「度水落花舞」は、〈落花〉を讚美の念で描く詩想の面では漢詩文の世界に、また〈舞姫〉を比喻として用い幻想的に表現している技法の面では和歌の世界に、それぞれ重なる。いわば〈和〉と〈漢〉の共存体と見られる。

5. 〈山家〉詩における〈和〉と〈漢〉

『本朝麗藻』「山莊部」には、次のような公任の詩が収められている。

白河山家眺望詩
(白河山家眺望の詩)

郊外卜居塵事稀(郊外に居を卜して 塵事稀らなり)
迢々春望思依々(迢々たる春望 思ひ依々たり)
荒村日落煙猶細(荒村に日落ちて 煙猶し細く)
遠岫雲幽鳥獨歸(遠岫に雲幽かにして 鳥獨り歸る)
來去旅人行眼路(去來の旅人は 眼路を行き)
淺深花錦織心機(淺深の花錦は 心機を織る)
蓬居雖恥仙郎到(蓬居に 仙郎の到るを恥づと雖も)
愁命詩篇惜晚輝(愁に詩篇を命じて 晚輝を惜しむ)

(『本朝麗藻』91)

都から遠く離れた山家¹³⁾住まいが、世俗の紛わしさを忘れさせると言い、春の景色を暖かい視線で描いている。頷聯の對句は陶潛の詩の世界を意識しており、「依々」は、懐かしげ・慕わしげなさまを表す。すなわちそれは陶潛「歸園田居其一」の「曖曖遠人村、依依墟里煙」句に重なっている。また「遠岫」は陶潛「歸去來辭」に「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還」句、すなわち無心な雲は煩いのない心、鳥が還るのは郷里に歸ることを想起させている。結局、公任は、この詩において官を辭して家に

13) 公任の山莊は、京都の東北郊、栗田郷と田中の里の中間にあり、『中古京師外地図』に明示されている。

歸ろうとする陶潛の心を重ね合わせており、山村での愈々自適な生活を謳歌し、安貧樂道の境地を味わっている。

ところでこのようなく山家>の詠法は、漢詩においては一般的なものであった。次の白樂天の詩を見ることにしよう。

香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁五首

(香爐峯の下、新たに山居を卜し、草堂初めて成る。偶々東壁に題す。五首)

五架三間新草堂(五架三間の新草堂)

石階桂柱竹編牆(石階、桂柱、竹、牆を編む)

南簷納日冬天暖(南簷、日を納れて、冬天、暖かに)

北戸迎風夏月涼(北戸、風を迎へて夏月涼し)

灑砌飛泉纔有点(砌に灑ぐ飛泉、纔かに点有り)

拂牕斜竹不成行(牕を拂ふ斜竹、行を成さず)

來春更葺東廂屋(來春、更に東廂の屋を葺き)

紙閣蘆簾著孟光(紙閣、蘆簾、孟光を著けん)

重 題 (重ねて題す)

喜入山林初息影(山林に入つて、初めて影を息むるを喜び)

厭趨朝市久勞生(朝市に趨つて、久しく生を勞するを厭ふ)

早年薄有煙霞志(早年、薄か煙霞の志有り)

晚歲深諳世俗情(晚歲、深く世俗の情を諳んず)

已許虎溪雲裏臥(已に許す、虎溪、雲裏に臥すを)

不爭龍尾道前行(争はず、龍尾道前に行くを)

從茲耳界應清淨(茲より、耳界、心に清淨なるべし)

免見啾啾毀譽聲(見くを免れん、啾啾たる毀譽の聲)

其 二 (其の二)

長松樹下小溪頭(長松樹下、小溪の頭)

班鹿胎巾白布裘(班鹿胎の巾、白布の裘)

藥圃茶園爲産業(藥圃、茶園、産業と爲し)

野麋林鶴是交遊(野麋、林鶴、是れ交遊)

雲生澗戸衣裳潤(雲は澗戸に生じて、衣裳潤ひ)

嵐隱山廚火燭幽(嵐は山廚を隠して、火燭幽かなり)

最愛一泉新引得(最も愛す、一泉新たに引き得て、)

清冷屈曲遶階流(清冷、屈曲、階を遶りて流るるを)

其 三 (其の三)

日高睡足猶慵起(日高く、睡り足りて猶ほ起くるに慵し)

小閣重衾不怕寒(小閣、衾を重ねて、寒を怕れず)

遺愛寺鐘欹枕聽(遺愛寺の鐘は、枕を欹てて聽き)

香爐峯雪撥簾看(香爐峯の雪は、簾を撥ねて看る)

匡廬便是逃名地(匡廬は便ち是れ、名を逃るるの地)

司馬仍爲送老官(司馬は仍ほ、老を送るの官と爲す)

心泰身寧是歸處(心泰かに、身寧きは、是れ歸處なり)

故鄉何獨在長安(故郷、何ぞ獨り、長安に在るのみならんや)

其 四 (其の四)

宦途自此心長別(宦途、此より心に長く別る)
 世事従今口不言(世事、今より口に言はず)
 豈止形骸同土木(豈に止だ、形骸を土木に同じうするのみならんや)
 兼將壽夭任乾坤(兼ねて壽夭を將つて、乾坤に任す)
 胸中壯氣猶須遣(胸中の壯氣、猶ほ須く遣るべし)
 身外浮榮何足論(身外の浮榮、何ぞ論ずるに足らん)
 還有一條遺恨事(還つて一條の遺恨の事有り)
 高家門館未酬恩(高家の門館、未だ恩に酬いず)

(『白氏文集』卷十六)

引用文がやや長くなったが、大江維時『千載佳句』や藤原公任『和漢朗詠集』に句が採られているように、平安時代最も広く知られていた白詩の一つである。

これは廬山の香爐峰の下に新たに山居を構え、草堂がやっと完成し、その東壁に題したものである。この山居は、香爐峰の北、東林寺の東北にあったが、香爐峰は、廬山の九十九峰といわれる連峰の一つで、形が香爐に似ている。白樂天が長安から江州(長江中流の潯陽)の司馬に左遷されて暮したところである。白樂天は、三十五才で「長恨歌」を書き、官僚として一応成功したように見えたものの、直言が原因で都から遠く離れた僻地に流されるようになる。四十半ばになっての挫折だったが、白樂天は、それに屈せず、翌々年香爐峰のふもとに草堂を結び、閑寂で自適な精神で在任期間を送る。その草堂の壁に題した上記の詩は、後日白樂天の代表作となり、日本にも伝わって、大人氣を博する¹⁴⁾。

詩の内容を見ると、まず、新草堂の規模や構造などを具体的描寫し、安貧樂道の境地を表して、そこに満足する心を詠じる。そして、山中の隱居生活の喜びを朝廷官吏としての奔走な生活に比べながら述べ(「重題」)、谷川や畑、野山、雲などの自然との同居の心地好さを述べている(「其二」)。時間に追われることのないのどかな日常の中で、寺の鐘は枕を斜めに立てて聞き入り、眼前の香爐峰の雪は簾を撥ね上げて見る、悠悠自適な生活を描き、長安だけが故郷ではないと強調している(「其三」)。そして、草堂に住む以上は、官界のことは忘却し、名譽に拘らず自然と共に生きていくことを願う心(「其四」)を詠じながら、全体を締めくくっている。

このように漢詩における〈山家〉は、都(官職、世俗、雜事)から逃れた、靜かで安らかな所として表されていたが、もう一つの例をあげてみる。

廬山草堂、夜雨獨宿、寄牛二・李七・庾三十二員外

(廬山の草堂、夜雨の中、獨り宿す。牛二・李七・庾三十二員外に寄す)

丹霄攜手三君子(丹霄手を攜ふ三君子)
 白髮垂頭一病翁(白髮頭に垂る一病翁)
 蘭省花時錦帳下(蘭省の花時錦帳の下)
 廬山雨夜草庵中(廬山の雨夜草庵の中)
 終身膠漆心応在(終身膠漆心応に在るべし)

14) 白樂天とその詩の世界については、『白居易研究講座』(勉誠社 1993)の多くの論文において述べられている。

半路雲泥迹不同(半路雲泥迹同じからず)
唯有無生三昧觀(唯だ無生三味の觀有り)
榮枯一照兩成空(榮枯は一照にして兩ながら空と成る)

(『白氏文集』卷十七)

この詩も、平安時代大変流行し、当時貴族に最も親しまれていた詩の一つである¹⁵⁾。夜雨の音を聞きながら一人で廬山の草堂にいた白樂天が、長安にいる牛二・李七・庾三十二員外に贈ったものである。左遷されて山家の生活をしている白樂天自身も長安の宮中で華やかな生活をしている友人も結局は因縁によって生まれた虚像であるという内容である。日本では今を時めく友人と零落した作者自身とを対照的に描寫した頷聯が特に流行し『和漢朗詠集』「山家」555や『枕草子』78段、『公任集』401番歌などに見られる。詩全体の主題は、一番最後の尾聯にあって、分別の相を超越した絶対の生に没入する觀念から見ると、むしろ華やかな生活がかえって空しくなるだろう、という。一見都の官職生活への憧れの心を表しつつも、實際は山家住まいの悠悠自適な生活のよさを打ち出しているのである。

このように、漢詩において〈山家〉は、都の紛わしきから逃れた静かな所としてよく描かれたりしたが、特に白樂天が左遷された僻地の生活の中で詠じた漢詩文は、日本では讃岐國に左遷され同じく山里暮らしをした菅原道眞に影響を及ぼすなど、日本の漢詩文においては多く受容され一般化された。上記の公任の『本朝麗藻』91の詩もその流れの中の一つとして見ることができる。

ところで、『御堂關白記』『小右記』などの記事によると、公任の山莊暮らしは實際はそれほど安らかなものではなかったようである。『御堂關白記』の次の記事を見てみよう。

明日御物忌、復推若輕、可出南殿給者、退出、後經通朝臣左衛門督辭書持來、即令奏、中納言・左衛門督等也、辭以兩度行幸行奉仕右衛門督加階爲上臈、仍其後不參内、其心也。

(『御堂關白記』寛弘元年十二月十五日條)

二十一日、丁卯、早朝罷出、前帥被免勅使授宣下、以午時參陣、被來左衛門督、上表返給次賜一階、仰詞云、去年十月不參内、定有所思歟、仍賜一階、早參可隨事者、是難非朝議有採用人也、仍被行之、入夜參賀、又被來、雨下通夜、以時申牛登西對北渡殿、所令令卜、申重由
(『御堂關白記』寛弘二年七月二十一日條)

寛弘元年(1004)右衛門督藤原齊信は、神社の行幸の行事を承り、その賞として加階され(權中納言正三位から權中納言從二位)、上臈となって公任(中納言正三位)を越える。そのことに公任は腹を立て、辭表を奉り、却下されはするものの、この年の十月から翌寛弘二年(1005)七月まで出仕せず白河山莊びたりの生活をするようになる¹⁶⁾。寛弘二年七月二十一日、天皇は五位藏人「仙郎」右中弁藤原經通を公任のもとへつかわし、一階を加える条件をもってして一件は落着する。公任は、その白河山莊時代に、實はかなり憂鬱な日々を送ったものと見られ、次のような和歌を残している。

15) 王朝漢詩と白詩との影響関係については、本間洋一「王朝漢詩の表現世界—王朝詩と白詩と」(『王朝漢詩文学表現論考』和泉書院 2002)に論じられている。 p.295-366

16) 公任のこの事件に関しては、『御堂關白記』の他にも、『公卿補任』『小右記』『續古事談』などにも記事がある。

- ① 春、白河に殿上の人々いきたりけるに
春きてぞ人もとひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ(『公任集』1)
- ② おなじ所に紅梅うへ給へるに、はじめて花咲たるにおはしたりけるに、女御の御もとより
植しよりしたまつ物を山里の花見にさそふ人のなきかな(『公任集』2)
- ③ 返し
うへ置し花なかりせば蓬生を何につけてか思ひ出まし(『公任集』3)

①歌は、『今昔物語集』に、

公任大納言於白川家讀和歌語第三十四

今昔、公任大納言、春比、白川ノ家ニ居給ヒケル時、可然キ殿上人四五人 許行テ、「花
ノオモシロク候ヘバ、見ニ參ツル也」ト云ケレバ、酒ナド勸メテ遊 ビケルニ、大納言此
ナム、

春キテゾ人モトヒケルヤマザトハ花コソヤドノアルジナリケレ
ト。殿上人共此レヲ聞テ、極ク目出テ讀ケレドモ、此レニ准ニモ無かりけり。

(『今昔物語集』卷二十四)

と説明があるように、宮中の殿上人達が公任の白川山莊を訪れ花見に来たと言った時歌ったもので、稀な訪問を皮肉って花だけが目当てだろうと拗ねてみせ、山里に疎遠な人への恨みや山居暮らしの寂しさを表したものである。また、そのような気持ちは、次の歌にも見られ、山莊の花見に誘ってこない恨み(②)に對して、やはり花だけが見物でその主はそっちのけであると言う(③)。

以上のように見れば、公任の上記の和歌における〈山里〉は、伝統的な和歌の類型のように、華やかなく都〉に對称的な寂しいものとして、あくまでも負のイメージで描かれていることが確認される。

しかし、その一方で和歌の世界と重なる部分も目につく。上記の『本朝麗藻』91の公任の作品で、第六句の「淺深花錦織心機(淺深の花錦は心機を織る)」の表現は和歌的な技法に基づいたものと考えられる。

- ① 花ざかりに京を見やりてよめる
見わたせば柳櫻をこきまぜて宮こそ春の錦なりける
(『古今集』春 56)
- ② いもがひもとくとむすぶとたつた山今ぞ紅葉の錦おりける
(『後撰集』秋 376)
- ③ から衣たつたの山のもみぢばははた物もなき錦なりけり
(『後撰集』秋 386)
- ④ 秋くればはたおる虫のあるなへに唐錦にも見ゆるのべかな
(『拾遺集』秋 130)
- ⑤ 水うみに秋の山べをうつしてははたばりひろき錦とぞ見る
(『拾遺集』秋 203)

すなわち、〈錦〉〈織る〉〈機〉は、和歌の中では、『古今集』以来、紅葉や花の美しさを表す時よく用いられる常套的な表現技法で、縁語であった。

縁語は、『古今集』において顕著な技法として確立し、平安和歌の修辭の根幹をなすもので、「ある表現を行う際に用字のうえで意味的に関連ある語(縁語)を選び用いて句(文)を構成する修辭法」である。『新撰髓脳』『和歌九品』などの歌學書、『拾遺抄』『金玉集』『深窓秘抄』などの私撰集、『前十五番歌合』『三十六人撰』などが現存するように、特に和歌に造詣が深かった公任にとって¹⁷⁾、和歌的な表現技法を漢詩文の中に取り入れたことは十分考えられると思う。

6. おわりに

平安王朝時代は、〈和〉と〈漢〉の二重性を保ちつつ、受容と反發という過程を繰り返しながら新しい表現の基盤を作り出していた時期である。そのような表現(觀念や發想)の和漢對比の二元的、多層の様態は、当時の文壇をより豊かで個性的にする原動力として作用したが、特に和漢兼作者はそのような過程を絶えず試しながら、ある程度様式というものを形付け、歌壇や詩壇を主導していたと見られる。和漢兼作者達は、和歌には漢詩文的な表現を取り入れ詩想の擴張をねらい、漢詩文には和歌的な表現技法を取り入れ固有の情緒を盛り込もうとした。藤原公任は、その代表的な人物で、漢詩文の世界と和歌の世界を行き来しながら、新しい世界構築に働いた人と考えられる。そのような過程の中で、〈和〉と〈漢〉の區別がつかないほど混ざり合うようになるが、それは中國の漢詩文が日本的に受容・定着していくプロセスとして位置づけることができよう。

【参考文献】

- ・ 渡辺秀夫(1991)『平安朝文學と漢文世界』、勉誠社、p.155-178
- ・ 工藤重炬(2000)『平安和歌漢詩文新考 継承と批判』、風間書房、p.259-287
- ・ 金原理(1981)『平安朝漢詩文の研究』、九州大學出版部、p.7-54
- ・ 本間洋一(2002)『王朝漢詩文表現論考』、和泉書院、p.295-366
- ・ 後藤昭雄(1981)『平安朝漢文學論考』、櫻風社、p.201-282
- ・ 川口久雄(1993)『本朝麗藻簡注』、勉誠社、p.21-22、p.38-39、p.226-227
- ・ 橘健二・加藤靜子(1996)『新編日本古典文學全集 大鏡』、小學館、p.115-116
- ・ 阿部秋生他(1996)『新編日本古典文學全集 源氏物語 3』、小學館、p.58-60
- ・ 石田穰二(1979)『角川文庫 新版枕草子 上』、角川書店、p.118-120、p.147-148
- ・ 東京大學史料編纂所(1952)『大日本古記録 御堂關白記 上』、岩波書店、p.121-122、p.153-154
- ・ 犬養廉他(1994)『平安私家集』、岩波書店、p.267、p.275、p.279、p.320

17) 公任の歌論については、「藤原公任の歌論—『和歌九品』を中心に—」(『日本文芸研究』 1983 6)に詳細に論じられている。公任は、和歌の詠出において、日本固有の情緒や日本的な表現を重んじ、漢詩句を和歌へ詠みなおす際も、〈和〉的な自然さを大事にしたものと見られる。 p.12-18

要 旨

王朝時代、中でも平安初期は、三代勅撰漢詩集の編纂によって漢詩文が一大盛期を迎える。この時期は、〈漢風謳歌の時代〉や〈國風暗黒の時代〉と称されるように、もっぱら〈漢〉的な要素が大きかった。その後、平安漢詩文は中國の漢文學を多く攝取、受容し日本的な展開を見せるようになり、段々と異國の言語(思想・觀念)によって自國の思想や感性が固有のものとして覺醒され、より豊かで可能性に富んだ國的文化として醸成していく。その漢詩文受容の過程は、〈漢〉から〈和〉への影響を基本としながら、一方では兩者の価値が相對的に接近し〈和〉から〈漢〉への影響も顯著になってくる。

その中で、藤原公任は、当時和漢兼作者として名が高く、歌壇や文壇を主導していた人物である。常に漢詩文受容の問題に苦心し、まわりの人にも漢詩句を和歌に詠みなおす方法を試していた。

公任の漢詩世界を具体的に見てみると、〈落花〉の詩においては散りかかる花びらを贊美の念で描き、〈漢〉の詩想を基盤にした上、舞姫の比喩によって花びらの幻想的な姿を描き、〈和〉の情緒を盛り込む。また、〈山家〉の詩においては、山里暮らしを悠々自適な精神で捉え、白樂天の思想を受け継いだ上、〈錦〉〈機〉〈織る〉のような縁語によって表現技法を和歌の常套的なものにしていく。

王朝時代は、〈和〉と〈漢〉の二重性を保ちつつ、受容と反發という過程を繰り返しながら新しい表現の基盤を作り出していた時期である。そのような表現(觀念や發想)の和漢對比の二元的、多層的様態は、当時の文壇をより豊かで個性的にする原動力として作用するが、それには〈和〉と〈漢〉兩方を行き來しながら表現方法を考案、様式化していた、和漢兼作者の存在があったと考えられる。

キーワード：枕草子 漢詩文 〈和〉 〈漢〉 日本的受容 藤原公任
和漢兼作者 〈落花〉 〈山家〉 白樂天

투 고 : 2004. 8. 31
1차 심사 : 2004. 9. 11
2차 심사 : 2004. 10. 2

電話：042-520-5363
E-mail：sunbun@mail.pcu.ac.kr

KCS I